



巻頭

ひと若(も)し 他(ひと)の過(とが)をさがし求めて
つねに怒りの 心を抱かば 彼の漏(まよ)いは増すべし
かくして漏尽(さと)りを去ること
いよいよ 遠(とほ)からん (法句經 253)

◇新：法句經講義 5 4 ◇

＜※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。＞

他人の過ちばかり探して、いつも怒っている人は、確かに「さとり」などには遠い人でしょう。とは言え、そうした人は、案外身近にたくさんいるような気がします。

最近はずいぶん変わったと思いますが、昔の自動車教習所では、車に乗ると、ずっと教官に叱られていた記憶があります。学校の先生にも、そんな人が結構いるのではないのでしょうか。

夫婦の間でも、相手の振る舞いが気に入らず、細々(こまごま)とずっと指摘するようになったら、かなり深刻です。家は大丈夫と思っても、さてお子さんに対してはどうでしょう。朝から晩まで、ずっと小言を言いつづけていませんか？

社会に目を転じて、人の過失や間違いを執拗に追求して、謝罪や退任に追い込む風潮が蔓延しています。某週刊誌など、それを売り物にして部数を延ばしています。国会でも、そんなことが延々と続いています。

人の過ちを指摘する前に、自分のことをよく考えてみれば、自分も案外大したことではないものです。「汝(なんじ)自らを知れ」はソクラテスの言葉ですが、生きかたの基本は、世界共通です。

叙景 表紙を語る

春の空が、乳白色に霞んで、どこまでも広がっています。河川敷につくられた、壊れかかったゴルフ練習場の柵にそって、細い道が続いています。土手の上に出たら、どんな景色に出会うのでしょうか。

今回は、江戸川の川原での一景です。春の空は、切ない別れや新たな出会いを予感するように、シンとしています。それが何か清々しい、そんな季節です。

今年は、身近な町の風景も取り上げていきたいと思いません。

< 主管所感 >

決断のとき 最後の白い山

友松浩志

寒い冬が過ぎた。基本的に夏より冬が好きな人間だが、今年の冬は寒すぎた。北日本や北陸の雪も、異常なくらい多すぎた。とはいえ、私は雪が好きだ。雪が積もる、町の音が消える。雪が音を吸収してしまうからだ。雪は音を通さない。

その冬も、ひとりで雪の山を登っていた。前日、長い長い林道を歩いて、南アルプスの2000メートル峰に突き上げる尾根の末端に、小さな雪洞を掘った。雪洞というのは、雪の穴だ。一人用だから、小さな穴を掘って、上にシートをかぶせれば出来上がり。中に座りこんで、壁を少し広げると快適になる。小さな棚をいくつか作り、寝床を広げれば、もう立派な家みたいになる。

日が陰り、暗くなったのでローソクをつける。雪洞の中はすべて白なので、一本のローソクですべてが輝きわたる。まるで白亜の殿堂だ。そして音が聞こえない。外は吹雪でも中は無音で、ローソクの炎さえゆれない。

その山は、最後と決めた冬山だった。40歳を過ぎ、もうひとりで危険な冬山に行くのは止めにしようと思った。体力の問題もある。でもそれ以上に、仕事のことや家族のことを考えた。もっとも登りたい山はある。でも「おしまい」という時がくる。決めるのは「私自身」だ。人には決断というものが必要な時がある。それは誰に言われてするものでもない。私か「私の生き方」を決める瞬間。そんな瞬間を、何度経てきたことだろう。そこにいたる時間は長くても、決めるのは一瞬だ。

次の日、朝の4時から懐中電灯をつけて登り始めた尾根は、やたら長かった。6時間余の奮闘でようやく稜線に近づくと、雪もしまり、快適に頂上に達することが出来た。最後の白い山、その真っ白な頂きを、今も忘れることが出来ない。

◆ホームページでも発信中◆

真理通信の読者を少しづつ広げています。

小紙「真理通信」も、まもなく100号となります。実際には、小形版の「真理通信」もありましたので、120号位発行していると思います。月刊誌「真理」を昭和60年に終刊して、神田寺・真理学園の広報紙がなくなってしまう、小部数でもいいから機関紙が必要と考えて始めた「真理通信」でした。

現在小紙は、神田寺の檀信徒、神田寺幼稚園・真理学園幼稚園の関係者、「真理」誌でご縁のあった方々などに1500部程配布していますが、一般の方の目に触れる機会は、ほとんどありません。

実は数年前から、神田寺のホームページが作られています。これは、以前神田寺に奉職して下さった山梨県富士川町の明王寺ご住職・標隆先師が、まったくのご好意で作って下さっているものです。ホームページの中には、「真理通信」のページもあります。一部を省略していますが、バックナンバーも気軽に呼び出せます。本紙が、一般の方々の目に触れる貴重な機会となっています。

「神田寺」と検索して頂くと、最初に出てきますので、是非ご覧下さい。

◆元旦修正会に集う◆

元旦午後2時から、今年も修正会（しゅしょうえ）を行ないました。仏教聖歌を歌い、仏教勤行式を唱えて、新年の平安と安寧を祈りました。

主管の講話は「代謝」のお話。「食べること」の大切さを説かれました。法話のあと、恒例の記念撮影。その後、甘酒で歓談しながら新年の抱負を語り合いました。新たな年を笑顔で始める、そんな一時となりました。

仏教豆知識 74

血脈

血脈(けちみやく)とは、血管、血の流れのことですが、仏教ではこれを、師から弟子への

「教えの流れ」として大切にします。師と弟子は、血縁がなくとも教えを継承することで

法門を継ぐ(法門相承:ほうもんそうじょう)、血脈相承(けちみやくそうじょう)すると言います。さらに

血脈は、お釈迦様からつながっているものと考えて系図にし、戒を授ける時、弟子の名を

最後に書き加えて、師から弟子に与えることもあります。(血脈譜)

また、一般の人が生前に法会などに参加して、「血脈」とか「戒脈」と書かれた包みを

受け取ることがあります。これは、一般の人でも法を受け継ぐものと認めたもので、その

人が亡くなると、遺骸とともに棺に入れます。



巻頭

怨(うら)みをいただく人々の中に
たのしく 怨みなく 住まんな
怨みごろの人々の中に
つゆ怨みなく 住まんな (法句経 197)

◇新：法句経講義 5 5 ◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

人として生まれたからには、人と関わって生きなければなりません。人とどう関わって生きるか、それは人類が始まって以来すべての文化で考えられ語られてきたことです。古代インドでも同じです。

すべての人が、優しくて親切なわけではありません。もちろん、すべての人が冷たく不親切なのでもありません。人というのは、そのどちらにでもなれるものです。人は人を憎(にく)むことも、恨(うら)むことも、いじめることもできます。でも、反対にほめることも、哀(あわ)れむことも、優しくすることもできます。

恨みというのは、複雑な感情です。意地悪をされたから、うらやましいから、不親切にされたから、いろいろな事情で起こる感情です。それを、人は人にぶつけてくる。それを受け取った人は、さらに不愉快になっていく。

人の言葉や態度から引き起こされた感情に、どんどん巻きこまれていく自分。詩人の相田みつを氏の詩に、こんな言葉があります。

「しあわせは いつも じぶんのところが きめる」

恨みを抱く人々のなかを、平然と生きていく。そんな勇気があれば、その人の心はきっと、楽しく幸せなものになるはずです。

叙景 表紙を語る

海や山に出かけて、見たこともない美しい風景を見るのも楽しいことです。でも、ごくあたり前の日常の風景にだって、心にふれるものがたくさんあります。

学校や職場への行き帰り、私たちはいろいろな風景に接しています。そして、それが私たちの心の風景、忘れられない風景になっていきます。

今号の表紙は、町中に見つけた小さな空地と、家々の上に広がる静かな夏の空です。東京の北部・板橋区で撮影しました。

< 主管所感 >

夏の始めに 棚経の思い出

友松 浩志

東京のお盆は、7月である。お盆は、先祖の方々、亡くなった家族の霊が、それぞれの家庭にかえってくる行事として受け継がれてきた。迎え火をたき、お墓参りをして、家庭には精霊棚をつくってお迎えする。その間に、お寺のお坊さんがお経をあげに来る。お盆が終わると送り火をたく。

お盆に寺のお坊さんが、家々にお経をあげに行くのを「棚経」という。私か棚経まわりを始めたのは、18歳の夏だ。もう、50年近く前のことである。

始めの頃はオドオドして、どのお宅にあがっても、お経だけよんで早々に退散したものである。折角用意して下さった料理や、飲み物にさえ手をつけられなかった。今になって思えば、失礼な話である。毎夏手伝いに来られた東北のお坊さんが、サイダーを出されてお経の合間合間にグップに苦労した話など、一緒に笑えるようになったのは、しばらくしてからのことだ。

割り当てられた地区に、一日何軒と決めて電車で移動する。暑い夏、どうしても眠たくなる。坊さん姿で眠りこんではいけないと思ってみても、電車で揺られると、ついウツラウツラしてしまう。暑い夏、寒い夏。雨の日、雷の日、いろいろな夏があった。

一番つらかった夏は、母が死んだ夏。高熱にうなされる母を寺におき、大急ぎで棚経をすませて帰った夕方、「棚経終わったよ」と言うと、小さな声で「ご苦労さま」と言ってくれた。数日後の入院、そして真夏の葬送。

たくさんの家庭を訪れた。親しく話しこんで、おそくなったこともある。多くの家庭の事情を知ること、人生の一端を私なりに知ることが出来た。そんな親しくお話しさせていただいた方々も、ひとりまた一人と、旅立って行かれた。

僧侶の入口にあった棚経という仕事。それは結局、自分自身の出口につながる、大切な仕事だった。また、そんな夏がくる

◆花まつりのお祝い◆

今年も、お釈迦様のお誕生日をお祝いする「花まつり」の行事が行われました。今年は8日が日曜日になり、「白象のパレード」は秋葉原の混雑を考慮して、前日の7日に行われたくさんの子ども達やご父兄に参加して頂きました。かわいい白象の山車も、作成してから40年近くたって、少しいたみも見られますが、まだまだ現役です。パレードを終えた子ども達は、花御堂のお釈迦様に甘茶をかけたり、少し甘い甘茶を飲んだりして、伝統の行事を楽しみました。



△ みんなで白象を引きました。



△ 花御堂のお釈迦様に甘茶がけ。

仏教豆知識 75

自然

自然とは、山川草木の自然を指すだけでなく、「おのずからしかる(そうである)」と読むように、本来そうであること、ひとりでのうあること、を指す言葉でもあります。

「自然のままに」とか「自然を尊重して」とか、生き方や人の振る舞い方に使うことが増えているようですが、仏教でも「作為のない」「ありのままの姿(実相)」として多く使われます。仏教では「自然」を「じねん」と読み、浄土系では「自然法爾」(じねんほうに)「おのずからありのまま」を尊重して、法然上人の名前もそれに由来しています。

■東墓地・合同墓を移設拡大■

東墓地に平成7年に建立した合同墓は、当寺の檀信徒で、後継者のいない方や、墓地の管理が難しくなった方等が、ご自分のお墓を整理して合同でご利用いただいています。(合同墓利用の方は、家名と供養者のお名前が墓誌に刻まれます。また、永代供養となりますので、墓地管理費がなくなります。お寺との関係は維持されます。)

少子化などの影響で、近年この合同墓のご利用希望が増え、従来の場所ではお骨の収納が難しくなったため、東墓地正面左のより広い位置に移設工事を行ないました。

スペースが広がり、お骨の収納量も増え墓誌も正面を向きすっきりしました。この合同墓は西墓地の方もご使用になります。



△ 移設し拡大された東墓地合同墓

ご関心のおありの方は、お気軽にご相談ご見学下さい。

◆平成29年度学校評価◆ 学校法人 真理学園

<法人全体>

・経理事務職員について交代準備を開始した。(一層適正な事務管理を行う)

<神田寺幼稚園>

・主任を置き、指導体制を充実させた。(業務分担の効率化を計る)

・非常用飲料水、非常食の一部を更新、入替を実施。(災害時対策の強化に努める)

<真理学園幼稚園>

・2歳児保育を開始した。(行政の指導を受けながら適正に運営する)

・水曜日も通常保育を開始した。(教職員研修や保育準備に支障のないよう配慮する)

・非常用飲料水、非常食の一部を更新、入替を実施。(災害時対策の強化に努める)

・園舎外壁・遊具等の塗装工事を実施した。(施設の安全管理に一層努める)

※以上、平成29年度・学校法人真理学園の自己評価についてご報告致します。



巻頭

老(おい)の日にまで 戒(いましめ)あるは幸いなり
正信(しょうしん)の 堅く樹(た)つは さいわいなり
智慧を得るは さいわいなり
悪しきを作(な)さざるは またさいわいなり

(法句経 333)

◇新：法句経講義 5 6 ◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

最近、年配者の乱暴な振る舞いが話題になっています。電車の席を、若者から無理やり奪い取ったり、接客の対応がまらずいと大声で怒鳴ったり、昔なら若者の特技だったような行動を、年配者が行なっているというのです。

確かに、郊外行きの電車に乗った時、年配者の集団が大声で呼び交わっていて、とても同じ車両にはいられなかった一なんてこともありました。あるレストランで、乱暴な言葉で苦情を言っている年配者を見たこともあります。

年をとると、社会の現状と自分の価値観が合わなくなってくるものです。自分の常識が通用しなくなってくる。それが許せない我慢ならないというのも、分からないではありません。もっと悪いケースでは、「これだけ生きて来たんだから社会の約束ごとなんてどうでもいい」と開き直る。これではどうにもなりません。

年をとっても、いや年をとったからこそ、我が身を戒め、正しく生きようと心がける姿勢が、今求められているように思います。豊かな実り多い高齢化社会をつくり出すのは、高齢者自身でもあるはずで、自らの生き方を見つめながら、しっかりと毎日を歩む。そこに、老いの日の幸いもあるように思います。

叙景 表紙を語る

雪が降る、それも冬の風物詩。もちろん、あまり降り過ぎるのも困りますが、適当に降ってくれば、雪もうれしい冬のプレゼントです。

とりわけ街に降る雪は、見慣れた街をおとぎ話のように変身させてくれます。汚れのない、音のない街。それは、大人の心もワクワクさせてくれます。

表紙の写真は、20年近く前、東京の郊外・調布で突然降りだした雪を撮ったものです。大きなボタン雪はどンドン積もって、たちまち「大雪」になった記憶があります。

< 主観所感 >

新しい文字文化

友松 浩志

このごろ電車に乗ると、ほとんどの人がスマホに熱中している。7人がけのシートの端から1人2人と数えていくと、全員がスマホをいじっている時もある。いったい何を見ているか分からないが、たいした売れ行きである。少し前だと、7人がけの半分くらいは居眠りをしている、そのまた半分くらいは新聞か雑誌を読んでいたように思う。居眠りをする人は確実に減り、それ以上に新聞や本を読む人が減った。駅のスタンドに積み上げられた新聞の姿ももうない。新聞社が窮地に陥っているのは確実である。

私は、電車に揺られていると眠たくなる。だから、たいていは眠っている。たまに、目が開いている時は、本を読む。まったく、古い古い人間になった。眼もだいぶ悪くなって(つまり老眼が進行して)スマホの画面を見るのが苦手である。スマホの画面に向かって拡大鏡(天眼鏡?)をかざすのもこっけいだから、結局車内では、本を読むことになる。

本を読むのは好きな方で、何でも読む。読むのがゆっくりだから、けして多読にはなれない。とは言え、いつも読んでいるから部屋のなかには本でいっぱいになる。地震の揺れが大きい時は本の下敷きになる運命にある。

本を読むのが好きな人は、「本を読むのはいいことだ」「あの本はいい本だ、この本がおすすりめだ」とうるさく言うが、私はそんな気にさらさらならない。本など、勝手に読めばいいと思う。演歌が好きな人に演歌をすすりめられても、聴く気にならないのと同じで、好きな本は自分で見つけて、好きな時に読むのが一番いい。

スマホのことだって、批判したいのではない。ある人に言わせると、新しい文字文化の時代なんだという。電話の時代は、文字なしの言葉の時代。メールやラインの時代は、新たな文字の時代である。「印刷術の発明」は世界を大きく変えた。スマホは、新しい世界を開くきっかけになるかも知れない。お寺でも、スマホを見ながらお経を読む、そんな日が目の前にせまっているように思う。そろそろ新しいメガネが必要である。

◆夏の思い出◆

— お泊まり保育を楽しむ —

神田寺幼稚園、真理学園幼稚園ともに、2学期のおし
まいに真理学園幼稚園の園舎で、
年長児の「お泊まり保育」を実施しています。友だちと
一緒にカレーをつくったり、森に
探検に行ったり、プールあそび、おばけ屋敷などなど、
楽しい思い出をつくっています。

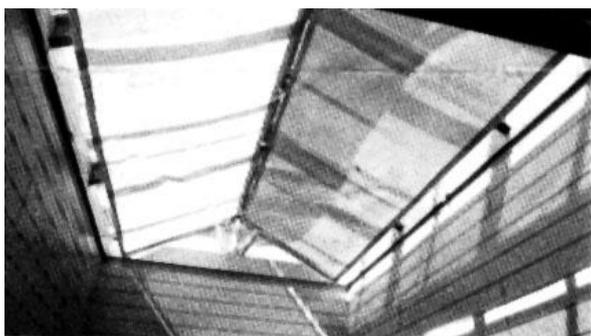
下の写真は、恒例のスイカ割り。目隠しをされてクルリ
とひと回りさせられると、
どっちへ行ったものやら。友だちの歓声をたよりに進ん
でいって棒をひと振り。とんでもない所をたたいて、ま
た大騒ぎ。親元離れ友だちとすごした思い出は少し心細
かった分、忘れられない思い出になるようです。



△ そこにスイカあるのかな？

◆日除けスクリーン設置◆

今年の夏も、大変暑い夏になりました。暑さ対策、熱
中症対策について、真剣に考えなくてはならない状況の
なか、真理学園幼稚園のテラスすべてに今夏、日除けス
クリーンを設置しました。明るい光を取り入れるため、
テラスのひさし全てがガラス製ですが、夏には暑さの原
因になります。夏ごとに工夫してきましたが、今年の夏
は限界を越えた暑さとなり、思い切って全面に日除けス
クリーンを緊設置したところ、室内の暑さを大分お
さえることが出来ました。



△ テラスに張られた日除けスクリーン

摩訶(まか)と聞いても何だか分かりませんが、摩訶不思議と聞くと「あーあのマカ」かと思ひあたります。意味は、「大きい」とか「非常に」とか「偉大な」といった意味で摩訶不思議とは、とても不思議ということです。

この摩訶はサンスクリット語の maha を音写したもので、マハーは「偉大な～」という形でよく使われます。般若心経にも「摩訶般若波羅蜜多心経」(まかはんにやはらみったしんぎょう)と、敬称のように摩訶を最初につけます。大きな嘘のことを、「まっかな嘘」と言いますが、これも「真っ赤な嘘」ではなく、「摩訶な嘘」ではないかという説があります。

日常の日本語のなかに、あたり前のようにインドの言葉がまぎれ込んでいる—これも、摩訶不思議なことです。